

# 学長室だより

2019.12.24 NO.21

## 優勝国に学ぶ「個」の確立

今年日本で初めて開かれた、ラグビーのワールドカップは、事前の予想をはるかに超えて大いに盛り上がった。秋田でも、事前合宿を実施したフィジー代表チームの練習風景を見ようと、秋田市の会場には多くのファンが訪れた。秋田はかつてのラグビー強豪県で、中でも秋田工は、全国高校ラグビー選手権15回制覇の偉業を誇る。

そのW杯の決勝戦では南アフリカがイングランドを破って世界王者に輝いたが、国際教養大では、ことのほか喜びが大きかった。というのも、榎田剛志君（4年）とジョシュ・ウェストブルック君（同）の2人がチームの通訳兼リージョナル・マネジャー（現地マネジャー）として参加し、チームを支えていたからだ。2人は本学のラグビー部で培った競技への理解度と語学力などから、難関の審査をパスして選ばれた。ただ、どの参加国に割り当てられるのかは決まっていなかったようだ。

2人は大会期間中、50人を超える選手やスタッフにずっと同行していた。現地マネジャーとして通訳から運転業務まで多種多様な仕事を成し遂げたことに、全選手やスタッフから感謝の意を伝えられた。ラグビーは南アフリカの国技で、国民全体が熱い思いを持つ。中でも、今回のチームは、一流のプロ選手の集まりだった。

プロといえば、思いつくのは自分中心で、ある意味わがままという印象をもつ方もいるかもしれないが、2人が選手たちのそばで感銘を受けたのは、その明るさと礼儀正しさだった。同行して1週間もたったころ、監督と選手たちから「日本の人たちやファンに対してあいさつや接し方など、どう対応したらよいか」とたずねられたことがあったという。選手たちは練習や試合の時は極度に張り詰めた緊張感に包まれているが、オフの時は選手同士で冗談が絶えず、オンとオフの切り替えが目を見張るほどはつきりしていた。

チームを通じての唯一のルールは、「チームに迷惑をかけない限り、各選手の個性を最大限生かして自由にふるまう」ことだった。これは、「個」の確立という本学の教育目標と重なるところがあり、2人とも大いに共感したようだ。

W杯の大会が終わり、秋田に戻ってきた2人は学長室にきて、「責任を果たしてきました」と報告してくれた。2人からもらった選手たちのサイン入りの南アフリカのユニフォームは、いまは学長室に飾っているが、いずれ構内にある図書館の一角で展示するつもりだ。

本学ラグビー部の主将でもあった榎田君は今回の経験でつちかった縁をいかし、南アフリカのトップアスリート育成機関への就職が決まった。ウェストブルック君は南半球の強豪が争うスーパーラグビーの日本チーム「サンウルブズ」の公式通訳に内定した。新たな舞台に進む2人の活躍を今後も見守りたい。

注) 朝日新聞秋田版「あきたを語ろう」からの転載です。以下 URL からご覧いただけます。  
<http://www.asahi.com/area/akita/articles/MTW20191224051550001.html>



鈴木 典比古

President Norihiko Suzuki, DBA